

(10) マンゴー
ア 殺菌剤, イ 殺虫剤

農薬名	成分名	系統名	RAC コード F:殺菌 I:殺虫	適用病害虫名													注意事項
				炭 疽 病	か い よ う 病	灰 色 か び 病	う ど ん こ 病	軸 腐 病	ゆ 合 促 進	チ ヤ ノ ホ コ リ ダ ニ	チ ヤ ノ キ イ ロ ア ザ ミ ウ マ	ア ザ ミ ウ マ 類	ハ ダ ニ 類	ド ク ガ 類 ・ ハ マ キ ム シ 類	コ ナ カ イ ガ ラ ム シ 類	カ イ ガ ラ ム シ 類	
〈 殺 菌 剤 〉																	
I C ボ ル ド ー 6 6 D	塩基性硫酸銅	無機殺菌	F:M01		◎												
アミスター10フロアブル	アゾキシストロビン	ストロビリン	F:11	◎													
オーソサイド水和剤80	キャブタン	その他	F:M04	◎												石灰硫黄合剤（果樹類登録）、ボルドー、マシン油等との混用は避ける。	
ジマンダイセン水和剤 ペンコゼブ水和剤	マンゼブ	有機硫黄	F:M03	◎												着色期以降の散布は避ける。 石灰硫黄合剤（果樹類登録）、ボルドー、マシン油等との混用は避ける。	
ストロビードライフロアブル	クレソキシメチル	ストロビリン	F:11	◎												ボルドーとの混用は避ける。	
スミレックス水和剤	プロキシト	ジカルボキシミド	F:2					◎								石灰硫黄合剤（果樹類登録）、ボルドー等との混用は避ける。	
セイビアーフロアブル20	フルジコニル	その他	F:12	◎													
トップジンMペースト	チオファネートメチル	ベンゾイミダゾール	F:1							果						果：【果樹類登録】	
トリフミン水和剤	トリフルゾール	SBI	F:3				◎										
バチスター水和剤	バチルス・スプレチス	生物農薬	F:BM02			◎		◎								着色期以降の散布は避けることが望ましい。	
バッチレート	有機銅	有機銅	F:M01						◎							塗布	
フジドーLフロアブル	塩基性硫酸銅	無機殺菌	F:M01		◎											果実着生していない時期に、炭酸カルシウム水和剤を加用して使用する。	
フルピカフロアブル	メニピリム	アミノピリミジン	F:9			◎											
ベルクート水和剤	イミダゾールベンゾイミダゾール	その他	F:M07	◎												予防散布に有効	
ボトキラー水和剤	バチルス・スプレチス	生物農薬	F:BM02			◎										ダクト内投入が効率的	
マスタピース水和剤	シュート・マス・ロゼシア	生物農薬	F:NC		◎												
ムッシュボルドーD F	塩基性硫酸銅	無機殺菌	F:M01					◎								炭酸カルシウム水和剤を加用して使用する。	
ロブラール水和剤	イプロジン	ジカルボキシミド	F:2			◎										石灰硫黄合剤（果樹類登録）、ボルドー等との混用は避ける。	
〈 殺 虫 剤 〉																	
アーデント水和剤	アクリナリン	ピレスロイド	I:3A									◎					
アクタラ顆粒水溶剤	チアメトキサム	ネオニコチノイド	I:4A									◎					
アタックオイル	マシン油	天然物由来	I:UNM										◎			使用時期：緑枝硬化期から出蕾期	
アドマイヤー顆粒水和剤	イタクトプロリト	ネオニコチノイド	I:4A									◎					
アドマイヤー水和剤	イタクトプロリト	ネオニコチノイド	I:4A									◎					
アプロードフロアブル	プロフェジン	IGR	I:16							◎				幼		【幼：幼虫】の発育ステージに適用	
カスケード乳剤	フルフェノクスロン	IGR	I:15									◎					
カネマイトフロアブル	アセキノル	殺ダニ	I:20B										◎			石灰硫黄合剤（果樹類登録）、ボルドー等との混用は避ける。	

ウ 病虫害防除法（マンゴー）

（ア）炭疽病 *Colletotrichum gloeosporioides*

（防除のねらい）

葉，茎，新芽，花房，果実に発生する。露地栽培では新葉に年中発生が見られ，発病は出芽時と開花期～幼果期の降雨との関係が深い。ハウス栽培ではビニール被覆前の発病が多く，その後の進展は緩慢である。果実での発病を防止するため，開花時期から幼果が10cm大以上に肥大する頃までの防除が大切である。

（耕種的防除法）

- （1）罹病葉を除去する。
- （2）開花期から幼果期にビニールによる雨よけ栽培を行う。

（イ）かいよう病 *Xanthomonas campestris pv. mangiferaeindicae*

（防除のねらい）

葉，枝，果実で発生する。組織表面に黒色斑点を生じ，枝では条件により縦に裂ける。古い葉や枝幹で越冬した病原菌が，降雨によって伝搬され，風傷害から侵入すると考えられている。

（耕種的防除法）

- （1）罹病葉，罹病枝は除去する。
- （2）防風林や雨よけ等により風雨害を避ける。

（ウ）灰色かび病 *Botrytis sp.*

（防除のねらい）

花房や傷口から侵入して伝染し，花房での発病では落花して着果しない。施設栽培で発生し，特に密閉などにより多湿条件になると多発する。

（耕種的防除法）

花殻除去を徹底し，また通風を良くする。

（生物的防除法）

ボトキラー水和剤を用いたダクト内投入法が利用できる。

（エ）うどんこ病 *Oidium mangiferae*

（防除のねらい）

葉，花，花房や未熟果実の表面が白い粉で覆われる。花梗や花に発病すると開花不良または落花する。通気不良，日照不足で発生しやすい。

（耕種的防除法）

換気や日当たりを良くし，密植しない。

（オ）軸腐病 *Lasiodiplodia theobromae*

（防除のねらい）

花房，果実の軸，枝が褐～黒変し，花芽に発病すると開花不良または落花する。発病の多い（病原菌密度の高い）ほ場で収穫した果実は収穫・発送後に褐～黒色水浸状に腐敗しやすい。通気不良で発生しやすい。

（耕種的防除法）

- （1）換気や日当たりを良くし，密植しない。
- （2）発症した枝や果実は除去する。
- （3）幼果期までの防除を徹底する。

（カ）チャノホコリダニ

（防除のねらい）

新葉，花穂に寄生し，密度が高いと新葉では葉がロールし，やがて落葉する。また，花穂では黒褐色の被害があらわれる。

(キ) アザミウマ類

(防除のねらい)

主要加害種はチャノキイロアザミウマとアカオビアザミウマの2種である。チャノキイロアザミウマは新芽、花穂および幼果に寄生する。幼果の加害部分は表面が象皮または鮫肌状になり、品質を低下させる。また、新葉の中肋を中心に黒褐色の条をつくる場合もあり、多発すると落葉する。なお、近年、従来と薬剤感受性が異なる新規系統が発生しているため、薬剤散布に当たっては散布後に効果の確認をすることも重要である。アカオビアザミウマは果実、葉（主に新葉）に寄生する。果実では日陰になる部分に多く、加害部分は白化し黒褐色の排出物が点々とみられる。新葉では主に中肋に寄生する。加害部は白化し、甚だしい場合は日焼け様症状を呈する。新梢発生期、開花前および落花期には発生に特に注意する。

(耕種的防除法)

チャノキイロアザミウマはイヌマキも発生源になるため、防風垣に利用する場合には、過繁茂にならないよう管理する。

(生物的防除法)

施設栽培において、スワルスキーカブリダニが利用できる。

(ク) ハダニ類

(防除のねらい)

マンゴーツメハダニとシュレイツメハダニの2種が認められている。

マンゴーツメハダニは、寄主範囲が広く、チャ、カンキツ類、モモ、ブドウ、グアバ、クリ、レイシ、オクラ、ワタ等を加害する。また、シュレイツメハダニはクズ、ビワ、レイシ、バラ等で寄生が報告されている。

両種ともマンゴーでは主に葉表を加害し、多発生すると、被害部が退色、白化してかすり状を呈し、後に褐変して光沢を失う。現在のところ、果実への被害は確認されていない。

マンゴーツメハダニの寄生は硬化した葉で多く、硬化した葉のなかでは、より新しい葉で発生が多い傾向がみられる。ハウス栽培ではビニール被覆や加温によって発生が助長される。奄美大島では3月下旬頃が発生盛期となることから、ビニール被覆後は特に注意する。侵入害虫であることから、未発生地では苗を導入する場合、十分注意する。

(ケ) ケムシ類（ドクガ類等）

(防除のねらい)

コシロモンドクガとタイワンキドクガが見られ、特にコシロモンドクガの発生が多い。ハウス栽培ではほぼ周年発生がみられ、新葉、花房を好んで食害する。二次的に加害部分から病原菌が侵入し、枝枯れを起こす原因となる。

防虫ネットなどにより成虫の侵入を防ぐ。また、コシロモンドクガの雌は翅が退化して飛べないため、園内での捕殺も有効である。

(生物的防除法)

果樹類で登録のあるB T剤を発生初期に使用する。

(コ) ハマキムシ類（チャハマキ等）

(防除のねらい)

幼虫は新葉を好んで食害し、新葉と果実が接する場合は果実をも加害する。このため、新梢の発生時期には注意が必要である。

(生物的防除法)

果樹類で登録のあるB T剤（デルフィン顆粒水和剤、エスマルクD F等）を発生初期に使用する。

(サ) カイガラムシ類

(防除のねらい)

枝、葉、果実などに寄生する。奄美群島で確認された害虫のうち最も種類が多い。登録薬剤が少ないことから、早期発見に努め、寄生葉、枝等を直ちに除去、処分する。また、苗を導入する場合は発生に十分注意する。

(シ) マンゴーサビダニ

(防除のねらい)

本種は、葉表の中肋に沿って白い膜状の分泌物を排泄し、膜と葉表の間に生息する。密度が高まると分泌物は葉表の全面に広がり、中肋に沿って褐変し、葉裏にも褐色斑点が生じる。

(ス) マンゴーキジラミ

(防除のねらい)

幼虫が新葉に寄生して吸汁加害するため、葉が黄化して落葉する。また、二次的にすす病を誘発させる。沖縄では、成虫の発生は周年とみられ、新梢の出現と大きな関係があり、ピークは9～10月頃である。

侵入害虫であることから、未発生地では苗を導入する場合、十分注意する。

(セ) アブラムシ類

(防除のねらい)

奄美群島ではワタアブラムシの発生が最も多く、その他にハゼノキアブラムシ、コミカンアブラムシ、ニワトコヒゲナガアブラムシ等が確認されている。主に新葉部に寄生し、伸長を阻害する。また、すす病の発生の原因となる。

(ソ) マンゴーハフクレタマバエ

(防除のねらい)

成虫は新梢、新葉に産卵し、ふ化した幼虫は葉肉部を摂食して水浸状の黄色斑点を形成する。成熟幼虫が蛹化のために地上に脱出した後、被害痕は円形の褐色斑点に変わる。多発生すると落葉することもある。本県での被害は、平成20年に初めて奄美大島で確認されたが、苗の持ち込み等により、分布を拡大することが懸念されるので、発生地からの苗導入は行わないことが望ましい。

(耕種的防除法)

下草の繁茂した比較的湿度が高い園地では被害が目立つという報告があることから剪定を怠らず、下草を除去するなど乾燥した状態に保つ。また、被害葉は炭疽病に感染しやすいことから早めに施設外に持ち出し、ビニール袋等に入れて処分する。